
超次元ゲームネプテューヌ～黒閃の騎士～『外伝』

燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲームネプテューヌ〜黒閃の騎士〜『外伝』

【Nコード】

N5208Y

【作者名】

燐

【あらすじ】

ゲームギョウ界の未来を掴んだ女神たち彼女達に訪れる平凡なひと時

彼、零崎 紅夜が冥獄神になる軌跡をそしてmk2に繋がる物語がいまここに語り継がれる・・・

って感じでギャグが大半ながら色々やっついこうかなと思います！ある程度進めたらmk2もやります（まだ無理ですけど）

では彼、零崎 紅夜の冥獄界に行くまでの地獄で天国の一年がここに始ります

いきなりこれはないと思う（前書き）

超次元ゲームネプテューヌ／黒閃の騎士／を見てくれた人またはこれが初めての人はじめまして燐です。

大半がギャグやら戦いやらになると思いますがどうか見てくれると嬉しいです。では

いきなりこれはないと思う

「ごめんなさい」

煌めく黄金の髪が地面と平行する。

——ここは神界、女神が存在する神の世界

「あゝ、うんいいよ！」

俺達はゼロハートと超越竜『ゼクスプロセッサ・ドラゴニス』に勝利して未来を勝ち取っただがお互いボロボロなので全員神界にて暫くの休養を取っていた

「それにしても、あれが夜天 空ですね」

俺の隣で呟くのは雄大なる緑の大地リーンボックスの守護女神グリ
ーンハート親しい人物からはベールと呼ばれている

「空とゼロハート、二重人格みたいなものだろ」

空は人に絶望しながらも心の何処かで可能性を信じていた。けどゼロハートは自分の考えを世界に押し付けたただ自分も傷つけたみんな傷つけた放浪していた

「なんか人でも神でも変われるだなんて彼を見ていたら思っわ」

そう呟くのは重厚なる黒の大地ラステーションの守護女神^{ハート}ブラック
ハートみんなはノワールと呼んでいる

「意思があればどんな生き物であつても変わるさ」

誰かに言われて変わることを者や

自分から言われて変わることを者や

切欠はいつくるかそれは誰にも分からないけどやっぱり大事なものは
自分を嫌いにならないこと自分で限界という壁を作ってしまったら
そこから動くことができなくなってしまうから

そついうふうにできているとおもつ

「全部終わったのね……」

「長かったですう……」

「けどこれでゲームギョウ界は平和だね！」

空はゲームギョウ界に対してのモンスター配給を止めた流石にゲイ
ムギョウ界から冥獄界にモンスターを送ることは出来ないらしいが
これでゲームギョウ界のモンスターが増えることはもう無いらしい

「ふう、これで帰れる」

これで約束を果たせる早くリーンボックスに帰りたいなベールも今
ここにいてからきつとアイツ（・・・）寂しがっているだろう

「あ、そうだ」

一通りみんなに頭を下げた空が何かを思い出したように手を叩く

「紅夜これ、プレゼント」

「……?!?!?!」

渡されたのはルビー色の不思議な形をした宝石を埋め込まれたイヤリング、パール達が口々に「手が早すぎですわよ!」とか「いきなりプレゼントとか卑怯じゃない!」とか色々言ってる

「いますぐ付けて、ってかずつと付けておいて」

「一生か?」

「一生だよ」

「……ソラサン? スコシオハナシヨロシデショウカ???」

「えっ? あ、うん」

パールを中心に空は外に連れていかれた渡された綺麗なイヤリングを首に掛ける。指で弾くとリーンと鈴がなった音が鳴り響く綺麗な音だ気に入った

——エンド・オブ・ザ・ノヴァ

ドゴーーーーーン!!!!

「うわぁ!?!」

突如地震でも起きたかと思うほどの振動が襲う

「空!?!ネプテューヌ!?!」

イヤリングに向けていた意識は天の彼方に飛ばし俺は急いで外に飛び出るそこにはボロボロのネプテューヌ達が積み重ねられその上に座る空の姿だった

「何やってんのおお!?!」

思わずこう叫んだ自分は悪くないはずだ

「いやね・・OHANASIという肉体用語に思わず全力反撃しちゃったんだよ・・・テヘ♪」

「テヘ♪じゃないだろうが!このバカ空!!!!」

ていうかそこはお前が負ける立場じゃないか!?!神はそう言っているぞ!?!

「どんなフラグでもぶち壊す！それが僕、破壊神だ！！！」

どうだまいったか！と言わん限り胸を張る空になんとか呆れてため息が出た

「……っでこのペンダントを外すなと？」

「そういうこと」

ガクツと頭が下がる。空がいうのはこうだ俺は存在変換で自分の存在をゲームギョウ界の負の神である冥獄界のハードであるブラッディハートに変換させた。

・・・ここまではいいが後が問題らしい俺はとくに記憶が戻っていないのにも関わらず半場強引で存在を変換をさせたせいで戻れない（・・・）とのこと更に俺自身を存在変換がもう使えないのこのペンダントは言わば俺の生命維持装置、神は信仰なくしてその存在を保つことができない俺の場合は全負同調で負をある程度身体に残していたから助かったものもしこれを消費していたら俺は問答無用で消えていたらしい。このペンダントはいわば小さいゲームギョウ界と冥獄界を繋ぐ門のようなもので俺が存在できるほどの負を常時俺に送ってくれるものらしい

これを外した場合は全負同調アイルマン・シンクロでもしてない俺は消えるとのこと基本的にゲームギョウ界の負の念は自然と冥獄界に送られていくものであり人間がいれば俺はずっと存在できるらしいどんな形であっても

「そうでしたの・・・色々とよかったですわ」

全員この話を聞いて心配するかと思ったがとにかく安息のため息を吐いた・・・何故に？

「そんで、紅夜にはしばらく自分を鍛えてもらうよ！僕が許可する意外は絶対に冥獄神化と全負同調は絶対禁止！！」

胸に手をクロスして強く言われるこれはなんとなくわかる記憶も結

局全部取り戻してない今の俺は武器の使い方を教えてもらった戦士、
どちらも負の念を極限まで使う切り札で俺はそのコントロールがま
だ危ない暴走の可能性もあとのことそのため空は一年の修行をのち
に冥獄界で冥獄神として実習を提案してきた

・・・本音は嫌だがそれしかなんだよな存在変換を使えばまた話
は別だがこうなった以上俺の選択肢はそれしかないらしい

「一年・・・か」

「短くない？」

「大丈夫！紅夜なら分かるけどレイちゃんの3倍はきつくするから
！」

「この話は無かったことに帰らせていただきます！！！」

ふざけるなただのあれ苛めだろ！？気絶してもあの人、空だ止める
まで永遠に攻撃してくるんだぞ！？めっさいい笑顔で！！その三
倍！？やってられるかアホー！！！！

今出せる究極のスピードですぐに外に逃亡しようとするが・・・

パシッ！

バタン！

「まあまあ、これもゲームギョウ界の為だと思って頑張つてよ」

「ゼロハートさんの手が途中で無くなったです!？」

「何の手品なの？」

「これはね空間操作の一種で僕の手の一部の空間を紅夜の足下の空間と繋げているんだよ。後僕の場合は空つてよんでよ気軽に読んだよ」

「助けてー！ー！！！殺されるー！ー！！！！！」

あれトラウマレベルなんだぞ！？反撃許されずただ一方的罵られるなんだぞ！？

「コウヤがも凄く嫌がつているし・・・辞めたら？」

そつだこの鬼！悪魔！魔王！ノワールがそう言っているぞ！！！！

「ふうん、ねえみんな・・・この写真欲しくない？」

胸から取り出したのは・・・一枚の写真？なんか俺に似た幼い（・・・）子供がパフェ食つてる・・・？

「そつ、それは!?!?」

「ふふん・・・ロリ紅夜を見たのは君たちだけじゃないだよ・・・つで君たち何をすべきか・・・分かるよね？」

・・・やめろ。ネプテューヌ！その手に持つ縄を捨ててくれ！ノワ

ール「そつ、そうよねこれはゲームギョウ界の為なのよね」とか言いながら得物構えるな！ブラン！その手に持っている危なそうな注射器何に使うんだ？「大丈夫麻酔薬」ぜんぜん嫌な予感しないんだけどー！ー！？

「ベツ、ベールー！ー！！！」

コンパとアイエフも似たようなネプテューヌ達と同じもつ俺にはお前しかない！

「・・・分かりました」

「へえ・・・」

「ああ・・・ベールううう」

希望だこれを希望と言わずなんと言っんだ！

「コウヤごめんなさい」

「・・・へっ？」

「私は・・・自分の意思を貫きますわ」

その瞬間、ベールを包む光晴れたその時には守護女神グリーンハー
トが降臨した鼻から愛を流しながら

「そつ、そんな・・・嘘だよな！嘘なんだろ！？」

「運命と言うのは時に残酷ですわね」

ああつああ、女神は俺を裏切ったああああ――

!!!!!!!!!!!!!!

『むっ？』

「どうしましたかにい．．ゼクス」

『誰かの断末魔が聴こえてな．．（何を言おうとしたんだ？）』

「そうですか．．久しぶりですねあなたと私が二人っきりなんて」

『そうだな．．お互い色々な物を見てきたな』

少し離れたところでは一応兄妹である二人（？）が昔話に花を咲か

していた

いきなりこれはないと思う（後書き）

どうでしたか？最初から飛ばしていきます！ネタ切れが心配です！
候補生達も早く出したいな・・・

エンド・オブ・ザ・ノヴァ：空が愛用している暴力というには相応しいほどの魔砲、本人曰く星を砕く光という技を元に作っ
たらしい・

故郷帰り（前書き）

m k 2 キャラ出せたぜ・・・ボールと仲いいのなら・・・だな

故郷帰り

草木が生い茂る丘を立つそれと同時に風が吹く。息を吸う今はこの久しぶりに帰って来た自然を独り占め

「帰って・・・来たんだな」

「ええ、帰ってくれました」

見渡せば中世の感じる街並み隣に微笑むベールを見ながら安心感を感じながら瞳を感じる・・・ほんと色々なことがあった・・・ベールたちに捕まって俺の人生オワタと思いながら自分の武器は壊されたことに気付いた空もそのことに気付いたのか修行は明日かららしい・・・ネプテューヌ達も自分の大陸になぜかししぶ帰って行った。

ネプテューヌ達と戦ったゼクスは守護するべき大地に帰っていきイストワールはネプテューヌに付いて行った

さて、あいつは一体何の武器作る気だ？できればシンプルなのがいな

「掃除・・・しないとな」

ずっと家空けてきたからな埃まみれだろうな・・・

「フフ・・・」

「ん？ベールどうしたんだ？」

とりあえず今日の予定を組み立てていると横にいるベールがなぜか笑った

「なんでもありませんわ」

「そうか・・・」

良く分からないが自分の顔が面白かったのか？と疑問を抱くが俺はベールに手を差し出す。ベールもそれを理解したように俺の手を握った

「おかえりなさい」

「ただいま」

ただいま、雄大なる緑の大地リーンボックス

「ここまでか」

「ええ・・・」

お互い手を繋ぎ街に下りて行ったもう顔を隠す必要無くなったのでフードは脱いでいるが妙に視線を（主に女性）を感じる隣のベールはいつもの顔して思いつきり手を握ってくるから痛かった。そんな時間もすぐに過ぎ去って中央協会の前

「今更だけありがとな集まってくれて協力してくれて」

「水臭いですわ私とコウヤの仲ですもの」

そう言ってお互い笑いあう中々繋げている手が離すことができない

「・・・また、来るからな」

「！・・・はい、また会いましょう」

俺の言ったことに安心を得たベールはゆっくり手を離して協会の中

に入って行った・・・

「んゝゝさて、俺も帰るか」

今日はいいい天気だ布団でも干そうと地面を思いつきり蹴るそれと同時に一気に俺の視線が持ち上がるそう言えば自分が説得してジャツドは元気だろうかさすがに今は牢屋にぶち込まれていると思うがこちらに協力してくれたしそれなり罪は軽くなったはずだ・・・いつか会えるといいな

「おつ、・・・」

地面に着地する目の前には自分の家が何も変わらずあった。鍵を差し込みドアノブを回す開けた瞬間、古臭さと埃で思わずせき込んでしまう。自体は思ったより深刻のようだ

まずは家の全ての窓を全開する。そしてベットの下に置いてある掃除機具を取りだす・・・他には何も隠してないよ？本当だよ？

神界を出たのは朝頃でリーンボックスに着いたのは昼頃だから今の時刻は三時頃なので小休憩に紅茶でも淹れてゆっくりする

「・・・平和だなゝゝ」

自分でもびっくりするぐらいの気の抜けた声が出る。初めはラストイションからの依頼から始ったんだよね・・・

あ、サンジュは元気だろうかあれも牢屋にいますかと思うけどちゃんと未来に向かって歩んでいけるといいな。空が半殺しにしてしまったギルドの過激派も病院で大人しくしているだろうか・・・

――・・・ま

「・・・ん？」

外からなにか物凄く懐かしい声と共に走ってくる音がする・・・ありえないよなあいつ確か病弱だし。嫌な気をしながら俺は扉の前に立ったその時

「お～～兄～～様～～～～！！！！」

「ぶつこらぺっぱ！？！？！？！？」

扉が吹き飛び（・・・）黄緑色の閃光が俺の腹部に直撃し思わず奇鳴を吐きだしながら俺は床に頭を強打した・・・前の俺なら意識がぶつ飛んでいたがどうやら神へと変換した俺は若干ながらも耐久性が上がったみたいだ

・・・それが吉か凶かと聞かれたら首を傾げるが

「やっと帰って来たんですね！ラステーションから帰ってらっしゃった時なんでベールお姉様にお会いなさったのに私に会いに来てくださらなかったのですか！？しかも協会を裏切ったと噂で聞いたと思っただけの間にカベールお姉様とお兄様が事件を解決してそのお祝いにと思っただけルウィーに行ってたと聞きましてどうして私に一言、言ってくださらなかったですか！？ベールお姉様から先ほど帰って来たと聞きまして私思わずダッシュで来たのですのよ！？聞いてますか！？お兄様！！！！」

流れるような黄緑色の髪に紅榴石を思わせる少しつり上がった紅い眼、彼女の名前は箱崎チ力^{はこしき}。彼女の家は代々ベールに仕えてきた一族でありベールと交流があつたので俺とは自然と関わりができたその中でいい意味でも悪い意味でも懐いてきたのが彼女だ・・・昔は色々あつて敵視されていたがある事故によりモンスターに襲われたチ力を助けてから妙に懐いてくるようになった今はすっかり俺の妹分になっている。普段は頭脳明晰、カリスマ溢れた優秀な奴なんだがな。少なくとも俺をいきなり押し倒してガトリングトークをする奴じゃなかったんでけどな・・・

「・・・聞いているよチ力」

「全く、心配をかけさせないでください！」

腕を組み俺に愚痴りだすチ力・・・いつになったら退いてくれるだろうか・・・

「それ・・・ごほっ、けほっ！・・・」

・・・過呼吸になるまで言うなよお前身体弱いんだから心配してくれるのは嬉しいけどさっ、と内心呟きとりあえず起き上がりチ力の足と腕を包むように持ち上げる・・・確かこれを姫様だっこっていうんだっけ？

「ずいま、ぜん・・・」

「全くだ・・・」

干したばかりの布団にチ力を置いて落ちつかせるその時に癒しの魔法付きで、最初は苦しく呼吸していたチ力であつたが徐々に落ちて着

いてきた

「その暴走癖、直せよ？お前に何かあったらベールと俺が心配するから」

「・・・お兄様の匂い・・・」

説教タイムと移行しようとするが布団を顔を埋めてボーとするチ力

「・・・聞いているか？おい」

「はっ！いい匂いでした！！」

ポコッ

「痛いです・・・お兄様・・・」

「お前が悪い」

変なこと言うチ力に一発拳骨・・・もちろん手加減したよ？

「あの・・・お兄様？」

「なんだチ力」

「その・・・えっと、今度はいつごろまで居てくれますか？」

上目遣いでこちらを見つめるチ力少しだけ紅潮した頬と布団を小さ

く握るその光景に萌えという文字が頭に浮かんだのは気の性・・・だ！

「残念だけど、明日また仕事だ・・・ごめんな」

「そう・・・ですか」

う・・・いかにも暗黒オーラ垂れ流して目を伏せるチ力に物凄い罪悪感が溢れてきた

「えつとだな・・・今日は暇だからさ、今日はこれからずっと相手して「本当ですか!?!?・・・おお」

いきなり月が出る直前に太陽が月を蹴り飛ばし昼に戻った感じになるチ力・・・

「今日はずつつつと甘えていいのですか!?!?」

「まあな・・・ほら」

腕を出すと猫が得物に跳び突くように俺の腕を抱きしめるチ力ついでに頭を撫でるとゴロゴロと言うこいつの前世は猫だなと思ってしまふ・・・俺の可愛い妹だ

故郷帰り（後書き）

チ力可愛いよ。とりあえず無条件で
次回は紅夜の新武器そして・・・地獄の修行が始まるよ!!!

新たな武器そして・・・苛め（前書き）

すいません少々風邪を引いてしまつて全く更新できませんでした。
これから頑張っていきたいと思いますので頑張っていきます

新たな武器そして・・・苛め

「・・・空、不法侵入と拉致って言葉知っているか？」

さて俺は現在神界にいる昨日の記憶は確かチ力と一緒に昼寝（疚しいことはなかったからな！）して晩飯を馳走して協会まで送って俺は寝た・・・筈なんだが目が覚めると俺の目の前には空がいてその手には俺の新しい武器が入っているだろう横長いケースを持っていた

「不法侵入は正当な理由がなく侵入することだけど僕は紅夜と修行するという正当な理由があるから問題なし、更に拉致って無理やり連れて来ることを言うんだけど僕はゆっくり丁寧に赤子を扱うように連れてきたからノープログラム！」

「・・・ただの屁理屈に聞こえるのは俺だけか？」

「――神は言っているこれが空クオリティだと

「何か言ったか空？」

「ん？なににも言っていないよ？」

「・・・幻聴か？でも気の性で片付けられないような・・・

「そうだ空、俺の新しい武器って？」

「うん、冥獄神化時の紅夜の武器は双銃剣だからそれに合わせて普段は大剣と銃にしたよ」

持っていたケースを地面に落とす空が指を鳴らすとケースが開いた。
・・手で開けるよ

「これが紅夜の新しい武器、『紅曜日』と『緋壊螺』だよ！」

紅曜日は黒曜日の刃を真つ赤にして双剣に分けなくなったがその中央には黒いディスクが嵌め込まれている
緋壊螺は赤黒き銃でその形状はいつか本で見たサムライエッジに似ている銃先には刺青のように刻まれているなんらかの術式

「銃か・・・」

二つの緋壊螺を持つ、魔法を使ってきたので銃をいままで使ってきたがなかったがこうもつとなんだかい

「緋壊螺は魔力を物質に変換して撃つことができるよ連射も砲撃も可能の一級品！制作時間は4時間！！」

一級品って言う割には制作時間短いな

「紅曜日は20時間だね」

まるまる一日使ったのか・・・それにしても出来すぎていると思うが・・・

「二つとも形を造るだけだったしね二つともヒビロカネという金属を使っているんだけど僕が長年加工してきたから硬いし魔力伝達とか凄くいいよ」

おもむろに紅曜日を構える重さは黒曜日と同じくらいだが分かるこれは人が作れるような武器ではないことを・・・

「長年っていったよな・・・何年だ？」

簡単に降る紅い軌跡を残しまるで生命を狩る為に生み出されたこの剣は俺が長年使ってきたと思うほどに俺の手に合う

「えっと・・・1億年」

「ながっ!？」

それ単純計算でもレイさんや俺に会うもつと昔になるぞ！

「長生きしているから。色々やりたいことがあるんだよ」

「・・・因みにお前何歳だ？」

こうなるとこいつ年齢がものすごく気になるのはきつと気の性じゃないはずだ」

「数えるの面倒くさくなつたから正確には分からないけど・・・最近1垓行つたかな？」

「・・・一億が可愛く見えるぐらいの歳でしたっつてそれおズヤ」
千回死んでみる?」・・・すいませんでした。額に緋壊螺を突きつ

けられ降参を称する為に両手を上げる

「まあ、多少は自覚はあるけどね・・・」

ため息つきながら緋壊螺二丁を貰うついでに専用の鞘も貰い収納していく・・・あ

「なあ、紅曜日のことなんだ？」

真ん中に埋め込まれている黒いディスクただの飾りのように見えるがこれは何らかの力を秘めているそんな気がする

「それはまあ、補助だよそれがあれば少しだけど冥獄神化と全負同調の反動を軽減できるんだ」

あ、それは便利だなあれは一言で言えば絶望だからな全ての負を背負い自我を保つこと自体が辛い

「二回目だけど僕の許可なしでは使っなよ？」

「了解」

最悪の場合は暴走するとかネプテューヌ達女神が希望により力を得られるなら俺は絶望により力が増すが俺の場合は毒を以て毒を制すと言った感じだからな

「・・・・・・・・」

そんな思考をしている俺に空は心底心配そうな顔で見つめていたの

を俺は知らなかった

「じゃ、始めるよ」

ただ草原が広がる地に空は何も構えず立っているポケットに手を突っ込んでいるから凄く余裕の格好だった

「・・・構えないのか？」

「ふ、構えつて無駄な物なんだよ。あると程度の実力者なら構えを見ただけでもどんな攻撃が来るか読まれるしね」

「・・・説得力が妙にあるがそんな実力者ゲームギョウ界に要るのか？」

「いないよ」

「いないんかい！」

きっぱり言い切る空に思わず突っ込んでしまう。ほんとこいつの考えが分からない

「ま、この構えは他人もしているからその人から取って・・・『夢幻ノ無花果』そう僕は呼んでいる」

「・・・確かに俺からしても空には全くとしても隙がないというよりあいつから放たれるプレッシャー前回とのこいつとの戦闘にこんなに冷や汗出たっけな・・・」

「お話はここまで・・・行くよ」

背中の中紅曜日に柄を握り腰に差している緋壊螺をいつでも抜けるように構える・・・先ほど空が行ったが立っているだけの構えなんて

普通出来っこねえよ。前回もそうだが戦闘経験や戦闘力は正直次元が違うまたボッコボッコにされて隙が窺って一気に・・・なんて甘い戦法はもう通用しないよな

「・・・っでいつまで戦闘は始つたのに考え事としているの？」

突如、後ろから聞こえる声、確認せずに身体を回転させ紅曜日を一闪する手応えはないなぜなら空は振つた紅曜日の剣に座っている（・・・）からだ。すぐに緋壊螺を抜き発砲するが身体を少しずらし避けられ掌底を顔に叩き込まれる

「ぐっ・・・!!」

相変わらずのバカ力だ地面に滑るように転がりすぐに緋壊螺を空をいた方向に向ける・・・消えていた

「違うー紅夜が遅すぎるのさ」

その声と共に背中に走る衝撃自分目線が一気に上空にまで上がるそして太陽に隠す様に広がるのは金色の髪とその腕の中で渦巻く力

「螺旋神魔槍!!!!」

腹部に撃ち込められた力は解放させ自分の身体は一気に地面へと叩き込めれる・・・つええ

「まだまだ」

虚空に腕を一闪させるすると空の回りに複数の空間の歪みが生じそこから・・・空を埋め尽く剣の数だった

「おつつつい!!!」

「大丈夫刃抜きしているから刺さることはないZE・・・多分」

多分ってなんだ!?多分って!?つか刃抜きでも少し尖った鉄が飛んできたら痛いだろう!!!しかもそんなもの何度も当たれば最終的に刺さるわ!!!

「ふっ、それで終われば君はその程度だったわけさ」

「カッコいいセリフを吐く前にまず君は常識力を学ぼうねー!!!」

「常識を知ると自分が否定されていくもんなんだよ!」

「お前は何様だ!!!」

「神様だ!!!」

もう嫌だこいつ

「武装・鉄血鎖斬舞!!!」

一斉に降り注ぐ剣の雨、俺は新たに得た武器を持ってこれ以上に無

いぐらの敗北を収めた

新たな武器そして・・・苛め（後書き）

空のボケ（？）と戦闘力に精神と肉体をボコボコにされた紅夜、剣をいままで使ってきたせいかうまく銃が使えない紅夜を見た空はは射撃訓練の為になぜかラスティションに連れていくそして新たな出会いも！ではでは

夢幻ノ無花果：正確には技ではなくただの構え立っているだけ空がそれなりの実力に対してのみ使う

螺旋神魔槍：魔力と気の反発を利用し相手に叩きこむ技、剣でも出来る

武装・鉄血鎖斬舞：武装と名のついた技は空が武器を空間に出して攻撃する時に付ける。この技は刃を取った千にも等しい数武器を発射させぶつける技、物理的に十分痛いが当たりすぎると刺さるかも・

射撃訓練？（前書き）

今日は頑張るぞ〜

射撃訓練？

「……っ！」

その手に持つ緋壊螺に目標に向かって撃つターゲットは左右に大きく動き弾丸を躲す腕をクロスし乱射するが掠る程度しかない。当たらないことに苛立ちを感じながら自分の周囲を回るターゲットに狙いを定め引き金を引く……

「……ヒョウカ55テン……」

あれから数時間後の結果が機械声で淡々と言われどっと疲れが身体を満たしていく顔に付けていたバイザーを外すと景色が一転し広がる草原だけが見通せる

「何点だった？」

「55」

横であれ？と顔を横にする空、どうやら思ったり出来ていないことに疑問を抱いているようだ……俺自身銃使うのは初めてに近いらんだが期待するなよ……

「自体は思ったり深刻……どうしょっかな……」

いまだに空の思想の中では昔の俺が混じっているらしく度々比べら

れる。そんなに昔の俺は強かったのかよ・・

「拗ねちゃった？」

「拗ねてねえよ」

緋壊螺を持つ俺の腕のサイズとか全て計算された俺の専用銃に仕上げてくれたのは嬉しいがうまく使いこなせない

「剣術の基本は出来ているから後回しでいいんだけどな・・・銃術はな・・」

「お前も銃使うなら教えてくれないか？つてか教えろ」

規則外のお前なら出来るだろう

「・・・分かったちよつとラステーションに行こう」

「話聞いてたか？」

「聞いてな〜い」

心に決めたいつかお前にもう一度勝つてやる・・・！

鋼鉄の工場が立ち上り黒煙が蒼き天空を浸食するように広がっていくここは重厚なる黒の大地ラストেশヨン

「っでここに何の用で来たんだ？」

「んゝゝまあ後でのお楽しみ？」

空の背中にとりあえず付いていく過ぎ去っていく人々の視線がかなり強い女性は俺に男性は空に・・・何とも気まずい

「どっしったの？」

「いやな・・・視線が・・・」

少しうんざりしていると空が振り向き声をかけてくるそれに返すがこいつは感じないのか？

「はぁ、自分の容姿くらい自覚持ったら？」

ものすごい呆れたため息を付かれた一体なんだ？

「もういいや、ほら行くよ」

強制的に手を掴まれ引つ張られるように連れ行かれるまた辺りの人が五月蠅い一体なんなんだ？

「・・・っでこっ？」

「こっ」

空に連れて来られたのはなんとゲームセンター・・・略してゲーセン・・・ってそんなことはどうでもいい！

「あ・そ・び・に・き・た・の・か・？」

「イタイタイイタイイタイ！！！」

俺の出来る全ての力でアイアンクローを決めるなにかの補正が動いたのか自分でもびっくりするくらい捕まえれた

「僕の天外頂点唯一無二の頭脳が~~~~！！！」

「・・・ここで『ぷちっ』としたほうが世の中の為になるだろうか・
いいような・悪いような・」

バンっ！

「・・・これは威嚇射撃よ！すぐその手の女性を離しなさい」

かすかに掠り飛んだ髪を見ながらこりやまずいと思い振り向くそこ
には・・・ノワールを少し幼くしたような女性だった・・・そして
空は男だぞ・・・見た目は女だが

「これがお前の狙いか・・・空」

「いや、計算外だけど・・・面白そうだから採用」

抑えていた腕を掴み危機感を感じたその時には横腹に衝撃が走り吹
き飛ばされる

「ええ！ちよつと！！！！」

・・・俺は受け身を取れずその女性を衝突した

「・・・・・・・・」

俺が目覚め最初に見たのは白、純白の穢れ白だった、上を向けばはみ出るように見える黒い布

「あいたた・・・一体何なのよ・・・」

白が喋った！？・・・なわけないか・・・ああもう・・・いやだ・・・

「・・・ひっ！？いやあああああ！！！！」

俺が見た最後の光景は振り下ろされる裁きの鉄鎚アサルトライフルだった・・・空、一発殴る

「やれるもんならいつでもどうぞ」

射撃訓練？（後書き）

はい名前は出てないけど誰だかは分りますね（思いっきりアサルトライフル使うのはとあの人だけだし・・・）

短いな・・・次回は今回よりは長くしたいな・・・と思っています

久しぶり？（前書き）

ユニとの会話少ない・・・

久しぶり？

「・・・知らない天上だ」

目が覚めお決まりの言葉を言ってしまうこれも神（作者）の策略なのかそれともただネタがないのか・・・疑問に思うがとりあえず身体を起こす近くに自分のコートが掛けられているが緋壊螺と紅曜日がない・・・うむ、ちょっとまずいな

窓を開き周囲を確認すると自分はラステーションの協会にいたことが分かった・・・ノール居るかな・・・

「目覚めたようですね」

後ろから声を掛けられ振り向くとそこにはスーツ姿の男性

「あなたは・・・？」

「私はガナツシュと申します」

眼鏡を付け直しいかにも腹黒そうだったのは秘密だ

「えっと、零崎 紅夜です」

「知っていますよ『黒閃』と言われた貴方は協会の中では有名です」

「はぁ・・・」

久しぶりに自分の二つ名を言われなんとも変な気持ちになるが自分の武器が気になった

「あの・・・自分の拳銃と大剣を知りませんか？」

「あれはこちらで預かっておりますこれから用事でもあるようでしたらお返ししますが」

なんか意味ありげないからだなっと考えると再びドアの開く音そしてそこから出てきたのは間違いないノワールだった

「・・・あんた一体何したのよ」

「・・・空の性です」

それを聞いたとたんああなるほどと可哀そうな物を見るよう目つきに代わる同情は時に武器になるってどっかの本に書いてあったな・・・
・心痛い

「どうやら私はお邪魔のようですね。ではデート行った仲ごゆっくり・・・」

「ちょっと！何言ってるのよ！ガナッシュ！！あれは・・・！」

「ただのお付き合いだよな」

そう言った途端ノワールがものすごく落ち込んだ・・・何故に事実だろ？

「えっと、ファイト？」

「貴方の性よ！この朴念仁！！」

なんでそこで俺がわからず屋になるんだ？何で怒るだこいつは・・
分からん。それからノワールを口を聞いてくれるまで数十分時間を
必要とした

「なるほど射撃訓練ね」

「あんまり得意じゃないからな」

要約話を聞いてくれるようになりラストイションに来た理由を話す。
ちなみに外に出ている庭の咲く花の香りが鼻を刺激する

「そう言えばコウヤは今まで魔法と剣術の混合だったんでしょ？」

「そう・・・だな、とはいえ詠唱中は無防備だからあんまり使わな
いんだけどな」

俺の使える魔法は殲滅魔法が多いからとにかく困る強力すぎたり詠
唱が無駄に長かったり余裕がある時しか使えないとてもめんどくさ
い・・・昔の俺は殲滅好きだったのか？

「私もコウヤにどちらかといえば剣術メインだし・・・やつぱりこ
こは！」

「ここは？」

「実戦でしょ！」

最終的にはそこにたどり着くのか・・・悪くはないかな？

「でも俺武器ないぞ」

「・・・ああ、ケイね少し待ってね」

と言いつ残し協会の中に入っていくノワールその背中を見ながら一息・・・さつきから視線を感じる後ろの木を見る

「・・・・・・・・バレバレだぞ」

ひっこりと彼女と同じ黒曜石を思わせる髪がはみ出ている

「あんたがああ『黒閃』？」

「俺自身が名乗っているわけじゃないけどな、勝手に名付けられているんだ・・・えつとさつきはぶつかってごめん・・・」

「ふん！あんたなんかお姉ちゃんにぼっこぼっこされるがいいわ！」

うわあ・・・滅茶苦茶怒っている・・・ってお姉ちゃん（・・・・・・・・・・）？

「まさか、お前女神候補生？」

四大陸の女神に会ったが確か女神以外にも信仰力シエアを集めることができる人（神？）材が女神たちの妹、女神候補生、よく見れば見るほど姉であるうノワールによく似ている

「そうよ私が重厚なる黒の大地の女神候補生『ユニ』よ!」

「やっぱりかノワールによく似ているな」

その強気な瞳とか髪の色とかそっくりだ

「・・・なんかリアクション薄いわね」

「いやな・・・なんか慣れた」

こんなに力づくよく女神（候補生がつくけど）に自己紹介されたのは初めてだけどなんかなあ・・・そういえば俺はどういう立ち位置なんだろう冥獄神と言われたけど冥獄界は空が守護（管理）しているんだし・・・なんもやることない俺・・・ニート神？

「ちよつと！顔面蒼白よ!？」

ニートは嫌だニートは嫌だ大事なことなので二回言いました。今度空に会ったら仕事のなもの貰わないと・・・!

「ダイジョウブ・・・モンダイナイ」

「その顔じゃ万人に聞いても疑われるわよ・・・」

「いつでもいい？」

「いつでも」

しばらくするとノワールが俺の武器を持ってきた聞く限りはどうもオーバーテクノロジーが多く使われているらしくこの教祖が売ってほしいとかまあ、一応あいつが俺の為に作ってくれたものだし売る気は一切ないし勿論断ったが

腰に緋壊螺二丁、背中に背負った紅曜日の柄を握り締めいつでも動

ける体制を取る対してノワールは既に女神化して巨大なシュートソード手に・・・やる気万全だ

「ユニ合図お願い」

「分かったわお姉ちゃん」

やっぱり姉妹だったのかユニが自分のアサルトライフルを手に空に向けた時俺は気を引き締めるあの時とは違ってもう自分を守る枷リミッターはいらない・・・全力で行く！

バンっ！

銃撃の音と同時に俺とノワールの剣が交ぜ合わさった

「分かっているけど前みたいに手加減したら許さないわよ！！！」

「はっ・・・いいぜ！ただしその頃、あんたは八つ裂きになっているだろうがなあ！！！」

――魔闘剣皇撃

連続に振るう剣舞それを全て受け流していくノワール、自分の持っているのは大剣だ懐に入られたら対処ができない

しゃがんだ直後、自分の頭上を通る刃そのままの体勢で足を蹴り体制を崩され剣を振り下ろそうとするがそれを読んでいたノワールは銃を構えており振り下ろそうとした大剣を横に乱入され銃弾を防御するその瞬間ノワールは銃を持っていた手を地面に付け横に身体を半回転し強大な質量と凶悪な加速力を付けた一撃が防御を押しつぶす

「……っ、痺れた」

「まだまだ……これからよ!!」

強い、前とは全然違う……ゲームギョウ界に起きた残酷な人の暴走そしてその女神が命を賭けて平和を目指した末路、そしてその歪みながらもその意思を受け継ぎやり直しと言う形でゲームギョウ界を守ってきた破壊神の信念それを俺達は破壊して今があるもし俺たちが敗北していれば……ノワールもみんなも今はいつものようにモンスター討伐に追われていたかもしれない。

けど、俺達は歪みながらも進まれた道をぶち壊し今を得たこれから起きることは定め（シナリオ）にはない。最後にゼロハートは教えしてくれたかもしれない……女神である責任そしてその名を背負う覚悟をそれはここいるノワールも含めてみんな理解した苦悩もしたけどその時はお互い支えあった……絆が俺達を知らない未来へ導いてくれた……だから俺達は証明しなくてはならない。

今ここで俺たちが成し遂げることは全力全開で前に進むことだ！

ノワール side

「（スピードが上がってきている？）」

最初の一撃でリズムはつかめこっちが優勢になったと思えばそれを飲み込むほどの力でコウヤは立ち向かってくる。不思議と頬が緩む

コウヤとの出会いを思い出せばこんなことになるなんて夢にも思っ
てなかったコウヤに手加減されて負けて落ち込んだに・・・だ、抱
きしめてもらって勇気つけられて一緒に食事して・・・襲われて協
力してモンスターを倒して

けど、町はボロボロになってそのときゼロハートが現れその時私の
ブラックハートとしての物語が始っただと思っ

イストワールを通してコウヤから言われた私が知らないゲームギョ
ウ界の裏の出来事、モンスターを生み出す冥獄界のハードであるゼ
ロハートが行ってきた数々すぐにそんな奴倒してやろうと神界に行
こうとしたのを止めたのはコウヤでハッキリ言われた『勝てない』
っと思ひしかつたけど私を倒したコウヤそして同じである女神は二回

立ち向かい瞬殺されたという事実には耳を疑った・・・他の女神と仲が良かったのも私だけコウヤの過去を知らないことに少し嫉妬したけど

超越竜『ゼクスプロセッサ・ドラゴニス』との戦いは苦戦を余儀なくされていたけどネプテューヌが自分から頭を下げてきたときはすごく驚いたけど思えば変なプライドで未来を左右するなんてそれは傲慢なこと私もみんなも・・・自分の信仰してくれる人を守りたいその思いで結束して倒した

「・・・楽しいわね」

「そうだな、けど・・・勝つのは」

私は零崎 紅夜のことを好き

まだ告白とかそんな勇氣はまだないけど・・・いつか私が勝ってあなたを私の物にしてみせるわ！！！！

「俺（私）だ（よ）！！！！」

ノワールside out

「
ふ
う
・
・
・
負
け
た
わ
」

「
・
・
・
俺
の
勝
ち
だ
な
」

空へ弾いたシュートソードは地面に突き刺さり紅曜日がノワールの首元に突きつけている・・・俺の勝ちだ

「完敗よ・・・まだ私のような戦闘モードにもなっていないんですよ？」

「暴走の可能性があるらしいから今は自分を高める為に修行中だ」
お互いの武装を解除する今回は単純な剣術と銃撃バトルだったので周囲の被害はすくない・・・方だと思う

「お姉ちゃんが・・・負けた？」

信じられない物を見るようにユニが呟いた

「上には上がいるのよ・・・今度は勝つけどね」

「そりゃ、楽しみだな」

そっつい笑いあうお互いもうボロボロだ

「っで・・・いつまで見物する気だ？空」

なにもない虚空へ言葉を掛けるすると空間が歪みそこから飛び出て来たのは興味深い顔の空だったユニが「お化けッ!？」と驚いたのは仕方がないことだな

「昔とは違うね」

「どういうことだ？」

「昔の紅夜は訓練派だったんだよ自分で鍛えて自分で強くなってくみたいな。けど今の紅夜を見た感じは実戦タイプだね戦えば戦うほど強くなっている」

「俺と俺を比べるな・・・とは言わないけど俺は俺だってこと理解してくれないか？」

その言葉に空は黙ったお前の知っている紅夜は・・・もういないんだ俺が代わりになってしまったから

「哀しいな・・・分かった訓練スケジュールを少し見直すね！」

前者の声はととても聞きづらい声だった。空は夕闇に染まっていく

「それじゃ、帰ろうか紅夜」

「おう、ノワールにユニまたな」

「またねコウヤ」

「・・・」

なぜかしばらく黙るユニどうしたんだ？

「あんたはなんでそんなに強いのか？」

昔も同じような質問されたな・・・答えることは決まっているけどな

「誰かを守ろうとする心さ」

「……っ！」

微笑んだだけなのになぜか目を逸らされた少しまぶしかったから片目閉じたけどなんかあったのか？

――ねえ、空やっぱりコウやって自覚ない？

――蟻んこ一つもないね。全く夕照をバックに笑顔＋ウインクなんて狙っているしか思えないよ

――まさかユニがライバル入りとかないわよね・・・

――女殺し（ガールキラー）の紅夜にその言葉は戯言だね

――ううう・・・やっぱり紅夜って・・・

―――なんだかんだ惚れた人の負けだよガンバ

―――ありがとって・・・はわわわわ！！何で知って・・・

―――これだけは昔も今も変わらないんだよね。ははは

―――・・・貴方も苦労したのね

―――・・・うん

以上女神と破壊神のトークでした

久しぶり？（後書き）

別に紅夜は銃が下手とわけじゃないんですよ空からしたら下手な話であってそれなりには上手いですよ人間レベルなら当たる確率で言えば10発中7発あたるぐらいです

初めてside使ってみましたけどどうでした見直してグダグダだな・・・と思いながらmk2の設定をいまだに考え中・・・初めは決まっているけど最後が全く決まらない・・・！

やっぱりお前は常識力を学べ（前書き）

今回はある意味予告編みたいなもの、短いです・・・どうぞ

やっぱりお前は常識力を学べ

「冥獄神としてなにかやることあるか？」

いつもの模擬戦（という名の苛め）を終えた後、草原に寝転び疲労により首だけしか動かせず俺の視線にはいるのは風と撓まれる黄金の髪

「ん？ん〜」

顎に手を置き模索する凜々しくも美しくそして可愛さも含めた反則的な貌を歪ませ光を拒絶させる銀の双眸が独特の輝きを放つ

「今はないかな、冥獄界は僕が管理しているし・・・まあいつか僕の代わりになってもらうことになるけど・・・まだ無理だね。冥獄神化もまだ危ういし」

「う・・・」

模擬戦を通じて何回かは冥獄神化と全負同調になったが単純に言う^{ブラッディ・ハート・アリマン・シンクロ}と吞まれかけた（・・・）偽神化は負を吸収して力を得るがその分吸い込んだ分の負が身体を蝕んでいくがそれは自分の精神力で抑えることができるが冥獄神化の力の根源は『絶望』だその力を使いこなすのに俺はまだ未熟で逆に力に振り回されて最終的には吞まれて絶望の意思のままに動いてしまう。

負を強化に使えるほど吸収する偽神化はまだいいが全負同調はまん^{アリマン・シンクロ}ま全ての負と波長を合わせるので闇を司るほどの力を得るが、これは俺が核となつて複雑に絡み合う負を一本の糸にすることにすることにするこ

と己の一つの存在が全ての負の念をコントロールできる訳がない・
・ 大事なことはどんな負でも自分を保つこと

――まあ、言ってしまえば半分暴走している状態だ

操れはしないが使えることは出来る今の俺は三分だけ正気を保つことが出来る暴走したら・・・世界三つ四つは滅びるつと空に言い切られた

「大丈夫今のところ今のゲームギョウ界にタイマンなら紅夜は絶対に負けないよ・・・たぶん」

相変わらず俺の思考を読むのが得意な空確かにこの前ノワールに勝ったし一対一対なら自信がある・・・多分？

「僕の息子ゼクスならいい勝負が思っぜ！そして勝ってくれるよ！」

・・・こいつもしかして親らしいことしてないとか色々言っているけど・・・子煩悩？

「それにそろそろいいかなってね」

懐から出されたのは四大陸それぞれの地図だった頭に？が浮かぶ空は並べた地図に親指を噛み切ってそこからでる血で印を付けていく・
・ペンとか持っていないのかお前・・かなりビビるぞ

「僕はいつでもゲームギョウ界にいるわけじゃなくてねもし昔の・

・アレ（・・・）のような存在が出てきたら少しでも僕は向かうまで時間稼ぎになるようなとりあえずパラメータを色々MAXにしたモンスターを封印しているんだよ」

「そーなのかーって！そんな危ないモンスターがいるんかい！！！」

「そうだね解き放つたら今の大陸なら滅びるじゃないかな？強さで言えばゼクスよりちよつと弱いぐらい」

ネプテューヌ達が結束してやつと勝てたゼクスよりちよつと弱いぐらいつて滅茶苦茶脅威じゃん！

「ちなみに大陸一つ一つに封印しています」

「そんなのが四体もいるんかいー！！！」

なんて核爆弾を大陸一つ一つに置いているんだお前はー！！！！

「大丈夫だよ・・・ゲームギョウ界に危機が訪れない限りは封印は解けないようにしているし・・・でも、もう必要ないかもしれないから処理を頼もうかなってついでに僕の今のゲームギョウ界がどんなものか視察していきたいし・・・ちよつと話したいことあるし」

それってようは俺に後始末頼んで自分は遊ぼうかななんて欲望が見えるのが気の性じゃない気がする

「大陸中回るから再会や新たな出会いもあるかもよ？」

そうだなそろそろ作者が唯一最後くらいに思い出して出してないキヤラもいたしな↑メタ発言やメテ！by作者

「どういつ順番に回るんだ？」

「そうだねプラネテューヌ↓ルウィー↓リーンボックス↓ラスティ
ションを予定しているよ」

ボッコボッコにされた身体は要約動けるほどまで回復して立ち上がる
神界の空はいつでも青空だ

「それじゃ行こう紅夜！」

「へいへい、仕事もらえた分ましか」

満天の笑顔と強引に引つ張られ足が運ぶ今日もいい天気だ

やっぱりお前は常識力を学べ（後書き）

さてさてこれから大陸回るぞ！新キャラだすぞ
がすとは出したのにあのキャラは思い出したのがルウィの終わり
出すのを断念した自称正義のヒーローだすぞ！！次回で出るかは
分かんないけど！！！！

いさ！プラネテューヌへ！！（前書き）

今回最初少しシリアス？があとともう・・・はははははです。

いさ！プラネテューヌへ！！

四大陸の中で最も科学力が進んでいる大陸プラネテューヌここに一体で大陸を滅ぼすという凶悪のモンスターが居るということで俺こと零崎 紅夜はやってきました

「何がどう間違ったらあのネプテューヌが守護している大陸がこんなにも進歩するんだろう？」

隣で屋台で買った（奢らされた）アイスクリームを舐めながら辛辣な言葉を吐く

「それは関係ないと思うなプラネテューヌの人がもつと便利になりたいと思ってここまで進歩したんだその言い方はどうかと思う」

「・・・まあそうだね。感情の生き物だもんね人間は・・・」

やっぱり人間に対しては厳しい所があるなこいつの過去を見れば厳しくなるもの当たり前かな可能性を信じてても可能性は混沌だからなにが起きるか分からないからな・・・

街中を歩く空の貌は無表情に近いものだったが内心は楽しんでるように見えたずっとアイスクリーム美味しそうに舐めていたし口では言っているが正直者じゃないな空は

「あの、すみません！」

後ろから声を掛けられ足を止める振り向くとそこにはセーラー服に

似た服装にどつかで見た十字キーの髪飾り薄紫色の髪にぱっちり開いた瞳しっかりした雰囲気を持つネプテューヌの影を感じる女性がいた

「――！！！」

「・・・空？」

彼女を見た瞬間空の髪が星色に瞳はルビーを思わせる真紅に染まっ
ていく・・・っておい！？破壊神化！？
ゼロハート

「ちょ！しません！！」

状況が全く分からないがこのままでは危ないと判断した俺は路地裏に空を無理やり連れていく

「どうしたんだよ空！」

「――滅ぼしに来たの・・・？。いいよ、もう・・・こんなゲームギョウ界意味がないから・・・ごめんなさい」

「・・・ごめん気分悪くなったから討伐は明日にしよう」

「おい・・・！」

何も言わず空は空間を歪ませその中に入っていく・・・どうしたん

だあいつ、まるで敵でも見るような目をして・・・そんな疑問を抱きつつ俺は路地裏を出ると心配そうにこちらを見つめて来る先ほどの女性

「あの・・・私、気の障ることもしました・・・？」

「いや・・・元からちょっとおかしな奴だから大丈夫だえつと要件はなにか？」

「はい、お姉ちゃんを知りませんか？今日虫歯の検診で・・・」

それは困った姉だなそう言えばネプテューヌもよく食べるくせにすぐ寝るからアイエフが虫歯になるとか注意していたな・・・

「君のお姉ちゃんの名前教えてくれない？」

「ネプテューヌと言って私と同じ髪飾りしているんですけど・・・」

・・・はい女神候補生でした。これで二人目ですな

「はあ・・・あいつか」

「えっ？お姉ちゃんを・・・あ！もしかして貴方がお姉ちゃんが言っていたこうちゃんさんですか！？」

言い方がおかしいが間違っではないな

「まあそうだな、女神候補生様」

「様だなんてそんな崇高な存在じゃありませんよ候補生ですし・・・」

あ、私の名前は『ネプギア』です」

それでも普通ではまずなれないからなあと姉ネプテューヌと違って真面目だな

「零崎 紅夜だなよろしくなネプギア」

「はい！」

自己紹介を済ました所で姉探しが始った。なんで空がネプギアに対して敵意を向けたのかは分からないが・・・あいつは終わった・・・
・（ゲームギョウ界を見て来ているだから似た人が出ててもそれは不思議じゃない過去でネプギアに似た誰かが空と何かあったのか・・・
・きつとあいつは答えてくれなさそうだな

過去の事は切り捨てるとかを言ったら空は本気で怒るだろうなあつちからしたら俺達はまだやっと立った赤子程度ぐらいしか生きていないそれを理解せず言ってしまったたら喧嘩を売っているようなものだ

「あの・・・」

「なんだ？」

「いえ、ずっと難しい顔していたんで・・・」

女神候補生としてこのことを知るのはいづいぶん先になりそうだなまだ覚悟とか色々いるだろうし・・・なにより今は平和だからこんな暗い話はいいだろう。知らない方が幸せっていうのもあるしな

「大丈夫だ、問題ない」

「そうですか・・・」

姉とは逆だな・・・礼儀正しいし真面目そうだし身長は・・・もう同じくらいか？真面目成分はこっちが全部持って行ったか

「ネプテューヌが行きそうな場所は？」

「うゝん、ちょっと「危ない」と「ふえ！？」」

思考するために頭を下げたとき角から人が走ってきたのでぶつかる
と判断した俺はネプギアの手を引っ張るいきなりの事に反応出来な
かったネプギアはすっぱりと俺の胸に収まった

「~~~~~！！！！」

ネプギアの頭から沸騰したやかんの如く煙が吹く熱いぞ

「・・・大丈夫か？」

「ふあい！？だいひょうふでふ！！」

なるほど「はい！？大丈夫です！！」かこの頃空と会話していたか
ら常識がある人と会話すると新鮮さを感じる

「そうか、はい。また人に当たりそうになったら大変だしな」

そついい手を差し出す。だれださっき俺にこの女（神）殺しって言
った奴は

「は、はい・・・」

おずおずとネプギア俺の手を握ってくれたとても脆くてとても優しい手だった

「すう・・・すう・・・」

「こんなところにいたのか」

「この頃決まってここに来るので」

街から少し離れたモンスターが居ない森林、そのある一角の木に背中を預けて気持ちよく寝るこの大地の守護女神^{ハード}ネプテューヌここは昔モンスターが生息していたがもう全滅しているので危険はない

「ふう、起こすのはちよつとあれだし帰るか」

「そうです・・ね」

虫歯の検診なんていつでも出来るだろう・・まあ逃げるってことは虫歯あるだろうがな。全く女神がこれでどうするといままで繋いでいた手を離したいまからこいつを協会に送らないといけないからな

「あの・・・一ついいですか？」

「ん？」

背中にネプテューヌを背負ったところでネプギアに声を掛けられるなにか決心したような目をしていた

「じうさんのこと『お兄ちゃん』と呼んでもいいですか？」

・
・
・
・
・

・
・
・

・
・

・

「ブハッ！！！」

なんなんだこの破壊力は！危うくネプテューヌを落とすところだつたぞ！？いつもチ力にお兄様、お兄様つてベタベタされるがこれは全くの異次元だ！例えるならそう！空のゼロ・レクイエムを10発分の世界規模の威力！！ぐっ・・・沈まれ俺の顔の中心にある二穴何も出さなふんばれ！ここが正念場だ！！！！

「大丈夫ですか『お兄ちゃん』？」

「OK OK大丈夫だ」

隊長！もう限界です！。なにを諦めている！ここで諦めれば世界は終わる俺たちがやるしかないんだ今は耐えろ！。だめです！全てのパラメーターがオーバーヒートを起こしています！。ええい！『お兄ちゃん』・・・だというのは化物か！！

「帰ろうかネプギア」

「はい、お兄ちゃん」

ぐっ・・・後はまかした諸君の健闘を・・・。隊長？隊長オオオー
――！！！！

以上色々ぶっ壊れたプラネテューヌの一日でした

いさ！プラネテューヌへ！！（後書き）

今思えばこれをやる為にこの外伝を始めたかもしれない・・・ふう、次は戦闘あるよ・・・空とネプギアある意味で相性最悪かも・・・空は昔を見てきたからね。さて日本一というタイミングでだそう出来ればがすともだしたいな・・・そう言えば色々とした理由で有料コンテンツをダウンロードできないファルコムの戦いはユーチューブみれば大体分かるけど・・・ケイブの武器って良く分からない・・・戦い方も良く分からない・・・誰か教えてー！！！！

朝のひと時（前書き）

タイトルまんまです

朝のひと時

「おはよう」

「おはようこうちゃん」

俺はネプテューヌを協会に送った後、空が戻ってこないから適当な宿屋に泊ろうと考えたかイストワールと偶然鉢合わせ今日はここに泊まりせんかとお誘いを受け迷惑じゃないのかと聞いたがネプギアもむしろ泊まって・・・みたいな瞳で見られ結局泊まることになった・・・つで俺が目覚ますとそこには俺の腹に乗っているネプテューヌの姿だった

「昨日はお世話になったね！ありがとう」

「ちゃんと食った後は歯磨きしろよ？」

「こうちゃん私は睡眠欲という強敵に勝てないよ・・・！」

人の三大欲求の一つだしまあしかたがない・・・じゃ駄目なんだネプテューヌ

「じゃ、その時は頬を思いつきり抓ってやるよ」

「ええっもつと優しくしてよ！例えばさ『ネプテューヌ起きろ俺が見飽きてないだろう』とか・・・キヤー！」

なに一人で言って一人で暴走するんだ？あとそろそろのいてくれな

いか別にお前が重いというわけじゃないんだが・・・

ガチャ

「お姉ちゃん？お兄ちゃん？起き・・・」

入ってきたのはネプギアだった俺達を見た瞬間口が止まり顔が急激に沸騰していく

「し、失礼しました！！！！！！！！」

電光石火の如く部屋を飛び出すネプギアに俺達に頭にクエスチョンマークが浮かぶネプテューヌが俺の腹に跨っているだけなのに・・・
はて？

協会の中を歩くとても綺麗だった。これも清掃員の日ごろの行いの結果だなと感心しながら進む思えば他大陸の協会にこんなにくつきりしたことないな

「今日の朝ごはんになんかな？」

俺の腕を掴み左右に振るいネプテューヌに

「……………」

顔を真っ赤にしながら俺達の後ろについてくるネプギア

「ネプギア？どうしたの？」

自分の妹の異変に気付いたのか声を掛けるネプテューヌに要約ネプギアが口を開いた

「あ、あのお二人は恋人なんですか！？」

恋人？そんな仲じゃないだろうだいたいネプテューヌのような美少女が俺なんかと吊りあうわけないだろう俺達どちらかと言つと・

「・・・そうだねネプギア私達は「戦友だな」そうそうそうなん・
・えっ！？」

「お互い困った時に支え合ったり助けあったり笑いあったり一緒に戦ったり俺にとって大切な奴だ」

ネプテューヌが居なかったらとか思うとぞつとするようなことも旅の間でいっぱいあったからな

「うう・・・嬉しいけど嬉しくない・・・！」

「そつ、そうなんですか・・・ほっ」

俺の話を聞くとネプギアは安心のため息をネプテューヌは「うー」
とか唸りながら俺の足を蹴ってくる。辞める痛い

「ごちそうさまでした」

朝食はイストワール作で美味しかった小さい身体に大変だと思うので凄いと思う

「おいしかったよ！いーすん」

「そうですかそう言ってもらえるとうれしいです（*´、*´）」
美味しいがどうかで味わった感じな味付けなんだよな・・・はてどこで？

「いーすんさんって色々できますよね。誰かにおしえてもらったんですか？」

ネプギアの問いかけに目を閉じなつかしむようにイストワールは口を開いた

「ええ・・・空さんから」

「へー、そうなんだ」

そうか道理でイストワールの味付けを味わった気がするんだ・・空
お前自分でああ言っておきながら親らしいことしているじゃん

「女の子だからおしめと嗜みは必要条件！って教えられました・・・
ちよつと厳しかったですね」

「本当にあの人、親なんだ・・・」

ネプギアは誰か分からなそうな顔しているが一応会ったぞ敵意向け
られたけど・・それにしてもまあなんていうかあいつ自分で言っ
ておいて矛盾しているぞよくに言うツンデレ？の一種か？

「じゃ、そろそろ行くか」

食事済んだしそろそろ空が来るだろうといつものコートを羽織る

「どこに行くの？モンスター退治なら付いていくよ！」

「・・・あー中々強いらしいぞ？」

お前らが結束して倒したゼクスよりちよつと弱いらしいが

「ふふ、この頃対したモンスターが少なくなってきたからつまらな
いんだよね・・・こうちゃんが来たってことはそれなりに強いモン
スターを討伐しに行くんでしょ？」

ネプテューヌにしては中々鋭い恐らく俺一人になるだろうしいいか

「じゃよろしくな、最初に言っておくがあのゼクス並に強いみたいだから」

「『そんなモンスターがなんで居るの（ですか）！？』」

ネプテューヌとイストワールが声を合わす空に言われた俺みたいな反応だな。俺は四大陸に空がもしもの為と封印した四体のモンスター一の事を話すため息をつかれた俺だっけつきたいよ

「あの・・・全く話に付いていけないんですけど・・・」

「ネプギアがもう少し大きくなったら分かるよ・・・」

正確にはあいつの滅茶苦茶差に付き合うことになったら分かるぞ

朝のひと時（後書き）

空ツンデレ疑惑・・・どうですか？正直者じゃないからね・・・なんがおかしいな

今回も短くてスイマセン。次回は戦闘に持っていきたいです。では

ME・GAさんがなんとゼクス、空、紅夜を書いてくれました！みてみんな載っているので興味のある人は是非是非！！！！

勝負！『炎獄凱アマテラス』（前書き）

ぐだぐだ・・・です

勝負！『炎獄凱アマテラス』

空が印を元にネプテューヌとある森にくるここには少ないがモンスターが出現するが俺たち二人の敵ではない紅曜日の鎧となつてもらった

「ここに封印されているの？」

「あいつが言っている限りはな」

森林が並ぶ以外は何もない近くにもなにか祀られているとか怪しい洞窟とかそんなものはない

「・・・来たね」

しばらく歩いていくと木に寄りかかっている空を発見するこちらを見た瞬間警戒されるがやはりネプギアが居ないことが分かるとすぐに警戒を解く

「おはよう空ちゃん！」

「おはようネプテューヌ」

俺がどえらい目に合った（一話）を気になぜか女神たちと共感し仲良くなった取引らしいことでもしていたような気がする

「なあ、空どこにモンスターを封印しているんだ？ここには木しかないんだが」

見渡す限り木、木、木どこにも特徴的なものなんてない

「あのね・・・そんな危険なモンスターここに封印されていますよ
くなんて目印合ったら大変でしょ？」

ため息付きながら言われたただ確かにそうだが気を鋭くしても何も
感じないんだが

「紅夜の実力でも分からないように嚴重に封印したんだよ・・・さ
て用意はいい？」

「私はOKだよ！いつでも掛かってこい！」

「俺もどんなモンスターなのか楽しみだな」

「ふふ、まずは『天地は操作され因果は留まる、その結末は無きも
のでありさすればそれは不滅である黄昏の時間はここに来れるー
ーテラフォーミング・アトラクション』！」

空を中心に曼荼羅のような複雑な術式が展開される魔法だとは分か
るが全く意味が分からない。見ている景色すべてが歪み全てが再構
築されていきいつもの俺たちが先ほどまで見てきた光景に戻っていく

「ねえねえ何の魔法？」

「この魔法はね結界魔法の一種でこちら辺の全てを結界でつつんで
その中の因果、時間、空間を掌握して全て操作してなにがあっても
自分が決めた結果は操作する人の自由、勝っても負けても何度も挑
戦可能なのさ！」

「・・・えつと・・・」

空、ネプテューヌにそんな説明じゃ分からないと思うぞ

「ようはいくら暴れても問題ないってことだ」

・・・なんて結界だよ。これ俺がお前を戦う時に使われていたら俺に勝ち目なかったぞ戦う以前に勝敗自体が相手の思い通り勿論この結界で起きた結果は全てはいま空の手の中にある俺たちがもし負けても戦い自体を無かったことにも出来る・・・チートだ。結界壊し専用の武器でもなければ詰んだも同然だな

「さてさて、一応モンスターの特徴を説明するね名前は炎獄凱『アマテラス』灼熱の身体を持っていて物理的攻撃は弱点以外は効かないと考えておいて因みに弱点は自分達で探していてね。正直こいつ弱点さえ分かれば大したことないなつだから、一応紅夜冥獄神化と全負同調許可ただし三分だけ。質問は？」

「えっっ物理が効かないなんて卑怯だよっっ！」

確かに俺は少なからず魔法を使えるから行けるけどネプテューヌは物理一色だからな仕方がないかもしれないけど、そう思いながら俺はネプテューヌの頭を撫でる

「いや、弱点され見つければいいって話らしいだろ？いけるさ俺とネプテューヌならな」

「んっそうだね！私たちなら出来るよね！」

気持ちよさそうに笑みを浮かべるネプテューヌに頬笑み紅夜そしてそれを見て睨むように目を細める空

「……もういいですか？」

なぜか敬語で威圧感を出しながら問う空、目がどろどろとしていた。とても怖い

「……ええ、いつでもいいわよ」

ネプテューヌも女神化して自分の得物を持つ俺も背中にある紅曜日の柄を持ち同時に緋壊螺を抜けるようにする

「さすがに死にそうになったら手助するけど……まあ大丈夫でしょ、じゃ頑張ってね！」

なにもない空間に拳を叩き込む空それと空間に亀裂が走り鎖で縛られた扉のようなものが出て来る

「いかにも……って感じだな」

その呟きと共に鎖が引き飛び扉を突き破り炎の手が俺達目掛け突進してきた。ネプテューヌと俺は左右に飛びその一撃をかわす炎の手は地面を焦がしていた

「いきなりね」

「せめて全貌を見せてほしかったな」

その瞬間扉が吹き飛ぶその欠片がこちらに飛んできたので紅曜日を
抜刀、全て切り捨てる

「
■■■■■■■■ オオオオ！！！」

俺の願いが通じたのか全貌が明らかになる西洋の鎧を纏いその関節
に火が溢れまるで火の幽霊が鎧を憑いたと思わせる姿だったその大
きさは7mぐらいかな

声にならない咆哮のあと再び振り下ろされる拳その狙いはネプテ
ーヌだったが彼女はその拳を避け鎧を足場にい気に跳躍し頭部の兜
を吹き飛ばすがその中は炎

「――つち！」

アマテラスの怒りを買ったのか炎で形成された鞭がネプテューヌに
振り下ろされる緋壊螺を抜き魔力を充填され込めた魔力を『水』の
弾丸に変換させる！

銃口から発射された弾丸は蒼い閃光となりて炎の鞭を蒸発されそれ
によりアマテラスの視線がこちらに向き今度は足が振り下ろされる
すぐさま紅曜日を横にして巨大な重圧に耐える

「コウヤ！」

「大丈夫・夫！」

身体を魔力で纏わせ強化し一気に持ち上げる横になるアマテラスだ
がその関節部分から幾つも紅い触手が襲ってくるすぐにその場を離
れるが一つ一つ意思があるかのように独特的な動きで追い詰めて来

るが両手に緋壊螺を持ち水の弾丸を奴の予想ルートに連射し全ての触手を掃う

「それにしても・・・熱いな」

「そうね・・・ふう」

まるで太陽でも相手にしているような気分だ。アマテラスは吹き飛ばれた兜を掴み元の場所に戻す空だった兜から再び火が溢れだす

「弱点らしきところ見つかったか？」

「ダメね・・・外形にそれらしいものはないわ・・・あるとしたら中身ね」

先行してもらったネプテューヌの報告を聞いて頭を悩ませる・・・あの炎を吹き飛ばすほどの威力は緋壊螺にはない魔法はあるにはあるが詠唱が無駄に長い・・・昔の俺のバカ

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

自分の攻撃を全て妨害されたのに遂に糸が切れたのか纏っていた鎧が吹き飛びそこから人の形をした炎が出現した・・・脱皮かよ

「本気・・・みたいだぞ」

「ふふ、腕が鳴るわ」

魅惑の笑みを浮かべるネプテューヌに苦笑しながら紅曜日を構える

[.....! ! ! ! !]

全身の炎が爆発するように広がる俺はネプテューヌの前に立つ、走る紅蓮の後には全てが灰燼と化していくそれはまさに地獄への誘い

「じゃ・・・行くか！」

掛け声とともに紅夜のバックプロセスが開き血色をしたノイズの翼が放射されネプテューヌと共に疾走する。アマテラスは自分の弱点がばれたと理解し空間を埋め尽くすほどの炎弾を撃つが

「風皇絶空・赫練！！！」

右足を軸に双剣銃を重ね渾身の力で振りぬき暴風を発生させ炎弾を吹き飛ばしそれはアマテラスが纏っていた炎すら吹き飛ばす露出するアマテラスの本体である球状の宝石すぐに炎を纏おうとするがそれは隠す様に前後から紅と紫の影が覆う

「虎牙破斬・顎！！！」

立ち位置を交代した二人が同時に剣を下ろすと半分に分かれたアマテラス本体は命の瀬戸際に灼熱の紅薔薇を咲かせた

勝負！『炎獄凱アマテラス』（後書き）

結構普通に倒しましたゼクスより弱いつてしていたけどだいぶ弱い・
・次回は適当にプラネテューヌで過ごさせてルウイーに行こうかな・
な・
・
・

風皇絶空・赫練：ブラッディハート時に放つ強化した風皇絶空、ありとあらゆるものを吹き飛ばす暴風で攻撃する

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5208y/>

超次元ゲームネプテューヌ～黒閃の騎士～『外伝』

2011年11月23日13時49分発行